

展覧会評：「メロヴィング朝時代：芸術と文化の三百年（451-751）」

会期：2016年10月26日－2017年2月13日／会場：パリ、クリュニー国立中世美術館

安藤さやか

メロヴィング朝は、5世紀末から10世紀末にかけて西欧を支配したフランク王国の、最初の王朝である。フランク族メロヴィング家のクロウヴィス1世によって481年に建国され、ピピン3世によって751年にカロリング朝が始められるまでの300年弱の長きに渡って続いたメロヴィング朝フランク王国は、カロリング朝支配下で西ヨーロッパの殆どを覆うまでに発展した大帝国の基礎となるものである。西欧中世の歴史文化の形成に大きな影響を与えた、このメロヴィング朝を取り上げた展覧会が、パリのクリュニー国立中世美術館にて開催された¹。本展は、フランス国内の博物館や図書館だけでなく、ドイツ、ベルギー、ヴァチカン、イギリス、スイスの諸機関からの出展作品200点あまりによって構成される、同王朝の美術を取り上げたものとしては近年稀に見る規模を誇るものであった²。

企画を監修したのは、I.バルディエ＝フロンティ（クリュニー国立中世美術館主任学芸員）、Ch.ドノエル（フランス国立図書館中世写本部門所長）、I.ヴィレラ＝プティ（フランス国立図書館コイン・メダル・古美術部門学芸員）である。加えて本展は、出展作品を所蔵する美術館・博物館や、大学等の研究機関の専門家から協力を得て実現された。嘗ては古代ローマの公衆浴場跡地に建てられた修道院別邸であった同美術館のうち、ガロ＝ローマの冷浴室（frigidarium）であった一室を借りて開催するという、比較的小規模な会場を用いていた為、特定の順番に沿って鑑賞するような動線は設けられていなかった。従って、展覧会内容はカタログ³とほぼ同じ章立てをとっていたものの、会場内は鑑賞者が自由に各章を往来して見学できる、恣意性の高い構成となっていた。

では、章立てに沿って代表的な出展作品を取り上げながら、展覧会を見てみよう。メロヴィング朝の創始を解説する章で最初に目に入るのは、1653年にトゥルネで発見されたキルデリクの墓からの豪華な出土品である（cat. 1）。キルデリクは、メロヴィング家の始祖とされるメロヴェウスの息子、建国の祖であるクロウヴィス1世の父にあたり、5世紀後半にトゥルネを中心とするガリア北部で権力を築いていた。キルデリクの墓から発掘された、金銀の用いられた装飾具や剣の鞘、印章付きの指輪やコインといった副葬品には、彼の支配していたガリアだけではなく、ラヴェンナやコンスタンティノポリスに由来するものや、ローマ帝国の役人らが纏った服飾品と類似するものも多くまれる。これは、キルデリクが東西の地中海地域と強く結びついていたこと、そしてローマの伝統の影響を色濃く受けていたことを示している。展覧会のタイトルに「451-751年」とある通り、メロヴィング朝建国よりやや遡った、古代末期からメロヴィング朝への移行期を本展覧会は重



視しており、キルデリクにまつわる出土品はまさに、こうした展覧会の趣旨を象徴していると言える。

「古代と中世の世界」と題された章は、このような古代末期と初期中世の連続性や、メロヴィング朝時代に於ける古代ローマ世界の受容を特によく示す作例で構成される。シャルネで発掘された7世紀のフィブラ (cat. 48) には、メロヴィング朝期の金工品に典型的なクロワゾネやフィリグラネといった技法が用いられているが、中心に嵌められているプロフィールの表されたカメオは、古代末期のもの再利用である。加えて、古代末期の地中海世界に影響を受けて新たに制作されたメロヴィング朝の写本芸術も、このセクションで紹介されている。《アッシュバーナムのモーセ五書》(cat. 53) は、6-7世紀の挿絵入り写本であり、古代末期の旧約聖書の物語図像をよく伝える作例である。こうした出展作品は、未だに「暗黒時代」と見做されがちな初期中世が、決して古代世界と断絶した時代ではなかったことをよく示してくれる。

統一と分裂を繰り返しながら勢力を拡大したメロヴィング朝の君主の権威について解説する、「権力、その表象と記録」の章でひときわ目を引くのは、《ダゴベルト1世の玉座》と称されるブロンズ製の椅子 (fig. 1, cat. 4) だろう。この椅子はダゴベルトの没したサン=ドニに由来するものであり、12世紀にサン=ドニ修道院長シュジュールによってダゴベルトに帰されているものの、制作時期が果たしてメロヴィング期なのか、或いはカロリング期以降なのかについては、議論の分かれている作品である。但し、この豪華な椅子をダゴベルトのものとする伝承は、翻って、メロヴィング朝最盛期の王の後世に於けるイメージがいかなるものであったのかを示唆している。肘掛部分の透かし彫りが、カロリング朝期のアーヘン宮廷礼拝堂のブロンズ製の欄干と類似しているという指摘も、フランク族の造形様式や宮廷周辺の芸術活動を考える上で興味深い⁵。

ローマ帝国によるキリスト教国教化以降、世俗の行政組織は司教座教会によって引き継がれていき、司教が各教区の管理者としての権力を有するようになる。「現世と来世」と題されたセクションでは、典礼に用いられる彩飾写本や、金細工による聖杯・聖体拝領皿 (figs. 2a, 2b, cat. 64, 65) といった豪華な聖具が多数並べられた。これらは、キリスト教化と世俗権力による統制とが結びついたガリアの社会に於いて、典礼や説教、そしてそこで用いられる聖具や彩飾写本といった装飾美術が重要な役割を担っていたことを示している⁶。加えて、副葬品や墓碑、石棺彫刻を中心とする葬祭芸術が発達した。ニヴェルネに制作地が帰される石棺断片 (cat. 104) には、幾重にも重なる十字架が浅浮彫で表され、ソワッソン司教ドラシウスの遺体を納めたとされる石棺 (fig. 3, cat. 105) は、キリストのモノグラムを取り囲む葡萄唐草の傑出した浮彫で仕上げられている。こうした石棺彫刻は、当時のキリスト教葬祭美術が、人物像による物語表現より、記号



fig. 1 《ダゴベルト1世の玉座》
8-9世紀(12, 13, 19世紀に補修)
パリ、国立図書館、コイン・メダル
古美術陳列室 inv. 55.651



fig. 2a 聖杯 ブルグンド、5世紀後半
パリ、国立図書館、
メダル室 inv. 56.96

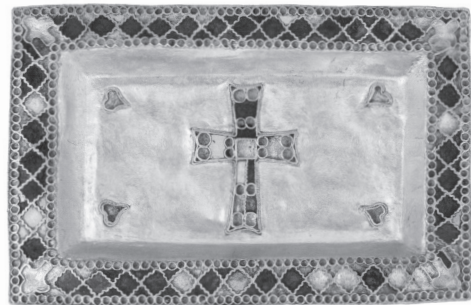


fig. 2b 聖体拝領皿 5世紀後半、ブルグンド、
パリ、国立図書館、メダル室 inv. 56.97



fig. 3 《聖ドラシウスの石棺》6世紀、ガリア南西部、パリ、ルーブル美術館 inv. MR 886

や象徴的モチーフによって担われていたことを示している⁷。

メロヴィング朝後期に活発化する写本制作活動を紹介するのが、「文字」のセクションである。リュクスイユ、コルビー、シェル、ランといった修道院を中心に、聖書や注解書を中心とする書物が、7-8世紀に次第に数多く制作されるようになる。リュクスイユのaugustinus写本 (cat. 123) は、パピルスに書かれた中世写本という点で現存する珍しい例であり、羊皮紙より耐久性の低いパピルス写本を目にする稀な機会を提供してくれていた。また、コルビーに由来するgregoriusの『フランク史』写本 (cat. 124) は、この時代にはしばしば複数の書体が一つの書物に併用されたことを示す好例である。

「メロヴィング朝の栄華」と題された章は、本展のクライマックスであり、インスラー（島嶼）写本を起源とする装飾模様を持つ彩飾写本や、ビザンティンの影響を受けた人物像表現のある工芸作品、ガラス工芸や金銀細工による服飾品といった、多岐に渡るメロヴィング朝期の遺物を数多く見せることで、この時代の美術が持つ多様性を存分に提示していた。augustinus著『福音書の調和について』写本 (fig. 4, cat. 189) は、古代末期の地中海地域に由来する組紐文を持つカーペット・ページと、インスラー写本に特徴的な組紐文によるイニシアルとの双方を備えている⁸。そのすぐ隣に陳列されたhieronymusの『イザヤ書注解』写本 (cat. 191) のインキピット・ページでは、組紐文で埋められた列柱のアーチ内に有翼獣に跨る一対の人物が表され、形象表現と幾何学的装飾模様の共存が見られる。このセクションで展示される写本は、当時の写本装飾が様々な起源を持つことを端的に示していた。

メロヴィング朝期の形象表現は、写本と同様に高価ながらも持ち運び可能な媒体である象牙浮彫で伝播された。冊子本は通常、展覧会では開いた状態で展示されるが、豪華な装丁を備える写本は本展では閉



fig. 4 アウグスティヌス著『福音書の調和について』
写本 コルビー、8世紀初頭
パリ、国立図書館、Ms. lat. 12190, fol. Iv-1r



fig. 5 《サン＝リュピサン福音書象牙装丁板》
ガリア或いはビザンティン帝国内、6世紀末-7世紀
パリ、国立図書館、Ms. lat. 9384



fig. 6 彫刻石板「獅子穴のダニエル」「アブラハムの供儀」
5世紀末
サン＝マクシマン＝ラ＝サント＝ボーム、
サント＝マリー＝マドレーヌ聖堂

じられたままガラスケースに入れられ、両面が見られるよう工夫されていた。《サン=リュピサン福音書象牙装丁板》(fig. 5, cat. 144) は、その制作地がビザンティンであるのかガリアであるのかについて、未だに議論が分かれているが、いずれにせよ、聖書の物語場面を表す初期キリスト教時代の図像をよく残している。このような浅浮彫による有機的な人物表現の作例がメロヴィング朝期のガリアやゲルマニアに伝わっていたことは、後に来たるカロリング朝時代に王国の宮廷を中心として開花した、《ロルシュ福音書象牙装丁板》(ロンドン、ヴィクトリア & アルバート美術館、Inv. 138-1866 / ヴァティカン、教皇庁図書館、Vat. lat. 50) のような、図像に富んだ象牙浮彫芸術を考える上では興味深い⁹。

一方、聖堂に安置される石棺や石製の祭壇障壁などには、この時代、硬質な線描彫刻や浅浮彫が施されることがあった。サン=マクシマン=ラ=サント=ボームからこの展覧会の為にパリへ運ばれた二つの石板 (fig. 6, cat. 206, 207) には、「獅子穴のダニエル」と「アブラハムの供儀」を主題とする図像が表されている。有機的な人体表現を鋭く簡素な線刻へ還元している同石板は、古代から中世への過渡期に於ける芸術的価値の変化を伝えるのに最適な作品の一つであったと言える。

最終章「新たな王朝へ向かって」のセクションに展示されていた数点の作品は、歴史上はカロリング朝初期に区分される、8世紀後半のものである。《グンドヒヌス福音書》(fig. 7, cat. 210) は、「マイエスタス・ドミニ」の図像や福音書記者像を描いた、素朴だが伸びやかな線といった様式的特徴から、美術史上はメロヴィング朝後期の絵画として挙げられる写本である。同主題の図像を持つ、古代末期の地中海地方の絵画様式を残す《コデクス・アミアティヌス》(フィレンツェ、ラウレンツィアーナ図書館、Ms. Amiatinus 1, fig. 8) や、カロリング朝期の《ヴィヴィアン聖書》(パリ、国立図書館、Ms. lat. 1, fig. 9) のような、比較対象となる写本画のパネル展示等があれば、メロヴィング朝美術の造形的特徴がより明確に見えたかもしれない。

メロヴィング朝からカロリング朝への移行期の出展作品で特筆すべきは、8世紀末の写本《ジェロームの典礼書》(fig. 10, cat. 213) だろう。ここでは同写本は、冊子を解体し、各フォリオを取り外した状態で展



fig. 7 《グンドヒヌス福音書》「マイエスタス・ドミニ」754-755年、フランス西部
オートン、市立図書館、Ms. 3



fig. 8 参考図：《コデクス・アミアティヌス》
「マイエスタス・ドミニ」700年頃、
ウエマス=ジャロウ修道院
フィレンツェ、ラウレンツィアーナ図書館、
Ms. Amiatinus 1, fol. 796v



fig. 9 参考図：《ヴィヴィアン聖書》
「マイエスタス・ドミニ」トゥール、
856/846年
パリ、国立図書館、Ms. lat. 1, fol. 329v

示されており、一冊の書物に施された多くの挿絵や装飾を同時に観察出来る貴重な機会を提供してくれていた。磔刑図や福音書記者像に加え、多様な起源を持つ動物文や装飾模様がイニシアルの中で共存・混交している同写本は、民族移動期にヨーロッパ各地から齎された造形芸術の諸要素が文字芸術のうちに集約されているという点で、メロヴィング朝展のフィナーレを飾るのに相応しい作品であった。

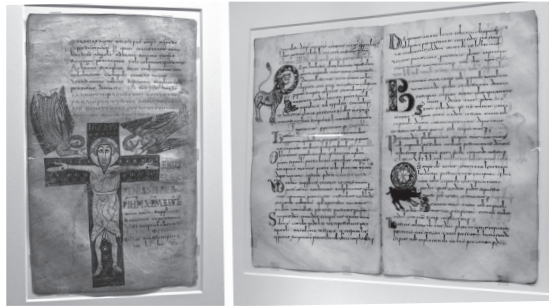


fig. 10 《ジェロームの典礼書》モー司教区、8世紀末
パリ、国立図書館、Ms. lat. 12048 左: fol. 143v, 右: fol. 92v-91r

本展覧会では、出展作品ごとの解説には当然ながら近年の研究成果が反映されてはいたものの、展覧会全体の内容は概説的なものにとどまっていた。メロヴィング朝という時代とその造形芸術について、本展が新たな視点を提示するものではなかった点は残念である。但し裏を返せば、メロヴィング朝期の主要な作品が一同に会し、企画展示室一つでこの時代の美術の概要を総覧することが出来る、稀有な機会であったと言える。メロヴィング朝時代全体を見渡す美術史学の研究は、管見の限りでは多くはなく¹⁰、美術に的を絞った展覧会も少ない。解説パネルも仏語に加え英語・独語で書かれ、より多くの来場者にメロヴィング朝期の造形芸術を紹介しようという教育的意図が見られた。筆者が足を運んだのが閉幕間際だったこともあってか、企画展示にあてられた一室は非常に多くの人で賑わっていた。質・量ともに十分な出展作品そのものと簡潔な解説とによって、ともすれば見落とされがちなメロヴィング朝という時代の美術に光を当て、広く知らしめようとした点では、意義深い展覧会であったと言えるだろう。

* 付記：本稿は、公益財団法人鹿島美術財団平成 28 年度「美術に関する調査研究」による研究成果の一部です。

註

- 1 本展覧会と連動し、「アウストラシア：忘れられたメロヴィング朝の王国」と題された展覧会（会期：2017年5月3日-10月2日／会場：サン＝ジェルマン＝アン＝レー、国立考古博物館）が開催された。Exp. cat., *Austrasie: le royaume mérovingien oublié*, sous la direction de DUPUY, Virginie, Musée d'Archéologie nationale de Saint-Germain-en-Laye, Milan 2016. これに際して、両展覧会に関連する講演会やメロヴィング朝時代に関する著作を紹介する特設インターネットサイトが作られている。<http://www.temps-merovingiens-musee-cluny.electre.com> (2017年9月12日最終閲覧)
- 2 メロヴィング朝をはじめとする初期中世を扱う展覧会では、歴史学や考古学といった隣接分野の研究成果とともに当時の美術について紹介される、或いは、取り上げる地域を限定したものが多く、メロヴィング朝フランク王国の美術全体を見渡そうとする試みは多くはない。過去のメロヴィング朝に関する展覧会の一例は、以下のカタログを参照されたい。Exp. cat., *Paris mérovingien*, Paris, Musée Carnavalet, Paris 1981; exp. cat., *La Neustrie: Les pays au Nord de la Loire, de Dagobert à Charles le Chauve (VII^e-IX^e siècle)*, ed. par PÉRIN, Patrick/ FEFFER, Laure-Charlotte, Rouen, Musées et monuments départementaux de Seine-Maritime, Rouen 1985; exp. cat., *Trésors mérovingiens d'Alsace: La nécropole d'Erstein (V^e-VII^e siècle apr. J. -C.)*, Strassbourg, Musée archéologique, Strassbourg 2004.
- 3 Exp. cat., *Les temps mérovingiens: Trois siècles d'art et de culture (451-751)*, sous la direction de BARDIÈS-FRONTY, Isabelle/ DENOËL, Charlotte/ VILLELA-PETIT, Inès, Paris, Musée de Cluny – musée national du Moyen Âge, Paris 2016.
- 4 クローヴィス 1 世によるメロヴィング朝建国より 30 年遡る 451 年は、フン族の侵入に対し西欧諸民族が連合軍によって抵抗した、カタラウムの戦いが起こった年にあたる。この戦い以降、西ローマの勢力が弱まったガリアでフランク族が勢力を拡大する。本展覧会ではこのカタラウムの戦いを、メロヴィング朝フランク王国の始まりを象徴する出来事として重視している。Exp. cat., Paris 2016, p. 12.

- 5 Exp. cat. Paris 2016, p. 60, cat. 4. 尚、越宏一氏（東京藝術大学名誉教授）は、アーヘンの宮廷礼拝堂の銅製欄干の透かし彫りが、フランク族による芸術的特質をよく示すものであると指摘している（朝日カルチャーセンター新宿校開講「美術にみるヨーロッパのあけぼの：カロリング朝美術 VII」2017年10月）。
- 6 初期中世教会に於ける聖杯や聖体拝領皿の重要性については、以下が詳しい。ELBERN, Victor H.: Der eucharistische Kelch im frühen Mittelalter, in: *Zeitschrift des deutschen Vereins für Kunstwissenschaft*, 17, 1963, S. 1-76, 117-188.
- 7 初期キリスト教時代、初期中世の石棺彫刻の概要については、以下を参照されたい。KOCH, Gutram: *Frühchristliche Sarkophage*, München 2000.
- 8 同写本の組紐文装飾の起源については、C. ノーデンファルクが以下で詳細に論じている。NORDENFALK, Carl Adam Johan: Corbie and Cassiodorus: a Pattern Page Bearing on the Early History of Bookbinding, in: *Pantheon*, 32, 1974, pp. 225-231.
- 9 キリスト教図像を持つ初期中世の象牙浮彫については、近年の研究では以下が詳しい。KAHSNITZ, Rainer: Die Elfenbeinreliefs der Adagruppe. Hundert Jahre nach Adolph Goldschmidt. Versuch einer Bilanz der Forschung zu den Elfenbein Goldschmidt I, 1-39, in: *Zeitschrift des Deutschen Vereins für Kunstwissenschaft*, 64, 2010, S. 9-172.
- 10 メロヴィング朝美術に関する体系的な研究として、例えば以下が挙げられる。COUTIL, Léon: *L'art mérovingien et carolingien, Sarcophages, stèles funéraires, cryptes, baptistères, églises, orfèvrerie et bijouterie*, Bordeaux 1930; HOLMQVIST, Wilhelm: *Kunstprobleme der Merowingerzeit*, Stockholm 1939; KNÖGEL, Anrich: *Schriftquellen zur Kunstgeschichte der Merowingerzeit*, Hildesheim/ New York 1992.

[図版出典]

Exp. cat. Paris 2016: figs. 1-3, 5-7/ POILPRÉ, Anne-Orange: *Maiestas Domini: une mage de l'Église en Occident (V^e-IX^e siècle)*, Paris 2005: fig. 8/ *Trésors carolingiens: livres manuscrits de Charlemagne à Charles le Chauve*, ed. par LAFFITTE, Marie-Pierre/ DENOËL, Charlotte/ BESSEYRE, Marianne/ CAILLET, Jean-Pierre, Paris, Bibliothèque nationale de France, Paris 2007: fig. 9/ 筆者撮影: figs. 4, 10